

笠女郎の歌とことば

大阪芸術大学 文芸学科 教授 龍本那津子

笠女郎(かさのいらつめ)は、万葉集第四期を代表する女流歌人の一人であり、大伴家持との贈答歌群によって特異な存在感を示す人物である。万葉集には29首の歌が収録されており、これは大伴坂上郎女の84首に次いで多い。

笠女郎の歌は、巻三・巻四・巻八に収録されており、これらの巻の年代(順置)から短期間に集中して作られたと考えられ、その活動時期は天平5年前後(733年頃)と推定される。現存する29首の内訳は巻三(比喩歌)に3首、巻四(相聞歌)に24首、巻八(春・秋の相聞)に各1首で、いずれも大伴家持に贈った歌である点が大きな特徴である。これに対して家持からの返歌はわずか2首のみであり、片恋的・悲恋的な構造が研究上の大きなテーマとなっている。

笠女郎に関しては、万葉集に残された歌以外に他の史料はなく、その出自も明らかでない。笠女郎という呼称は笠一族の女性という意味で、本当の固有名はわからない。笠氏は備中国(岡山県)に本貫(本籍)がある、中の下くらの元地方豪族で、三位以上の高位高官は出ていない。笠女郎に卓越した歌才を与えた父が誰であるかも不明である。現在のところ笠金村、笠御室、笠麻呂(少弥満誓)の3人が候補として挙げられているがいずれも推測の域を出ない。従って歴史的な人物としての実像は明らかでないが、これまでの研究では、歌群から次のような人物像が推測されている。

- ・情熱と知性を併せ持つ人物：窪田空穂は「知性の持つ強さと感性の柔らかさを兼ね備えた歌人」と評している(注1)。
- ・教養ある女性歌人：技巧的で遊戯性のある表現を用い、万葉後期の相聞歌の典型的テーマ(夢・人目・恋死など)を巧みに扱う(注2)。
- ・家持の周辺女性の中でも特異な存在：まとまった歌群が残されている点で他の女性歌人と一線を画す(注3)。

研究史における主要なテーマは以下の4つに大別される。

- (1)笠女郎の恋愛観と主体性
- (2)家持との関係性の再構築
- (3)語彙・表現の比較研究
- (4)後期万葉相聞歌の典型性と個性の両立

本稿では、特に上記(4)に関して笠女郎の歌風と表現の特徴について検討する。

笠女郎の歌は従来「技巧を主とし、詞を主とした歌の為の歌」(注4)などのように、技巧的で遊戯的な、虚構性に富むものと評価されることがあった。たしかに爛熟期とも言える万葉集第四期の歌人として、笠女郎の歌にも万葉集の中に多くの類歌、類想表現が存在する。しかし、一見類型的のようで、実は「個性」ともいうべきものが存在することがこれまでの研究(注5)で明らかになってきた。本稿では笠女郎の歌の「個性」を次の観点から考察する。

一つめは相聞歌の典型テーマの深化である。先に挙げた「夢」「人目」「恋死」は、いずれも後期万葉で多く読まれるテーマであるが、これまでの類歌にはない笠女郎独自の発想が見られる点である。

二つめは語彙・表現の開拓性である。万葉集には笠女郎が初めて用いた単語と句(五音・七音句)が複数確認され、後代の歌にも影響を与えたとされる(注6)。

そのうち笠女郎の歌だけに見られるものは
託馬野(3395) いまだ着ずして(3395)
真野の草原(3396)
結びし心(3397)
わか形見見つ思ませ(4587)
打廻の里(4589) 待てど来ずける(4589)
知るれや(4591)
夕陰草(4594)
全む限り(4595)
八百日行く(4596) 沖つ嶋守(4596)
山川も隔たらなくに(4601) 心ゆも我は思はずき(4601)
なかれ(4606)
鐘(4607)
大寺(4608)

また、笠女郎の歌に初めて使われ、のちにほかの歌人が用いたものは

- ※この月ごろ(4588→坂上郎女(4723)(81560))
- 立ち嘆く(4593→遣新羅使等(3580))
- 間近き(4597→湯原王(4640)(6986))
- 物思(4602→池主(94189)(4425))
- 後(4608→防人(204326))
- 鴨の羽色(81451→家持(204494))
- 朝ごとに(81616→)

である。※については、巻四・巻八において坂上郎女の歌が置かれている位置から笠女郎の方が先だと判断されるもの29首のうち少なくとも19首において独自の表現を開拓していることになる。

本稿では、このうちの二首

託馬野に生ふる紫草衣に染めいまだ着ずして色に出でにけり(巻三・395)

相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後ろに額つくごとし(巻四・608)

を中心に論を進めるものとする。

注1 窪田空穂『万葉集釋訳』第三巻 pp154 新訂初版 東京堂出版1980

注2 山口裕子「笠女郎の『人目』表現」、『三重大学日本語学文学』14巻pp49-64、2003

注3 浅野真子「悲恋の構造」、『別府大学紀要』第43号、pp1-8、2001

注4 土屋文明『万葉集私注』筑摩書房、1969

注5 青木生子「笠女郎—文学史的位相について」、『上代文学』第9号、1957

中西進「笠女郎と茅上娘子」、『万葉史の研究』(下)、桜楓社、1968年

黒田久美子「笠女郎の歌とその表現」、『美夫君志』第27号、18983

注6 吉野和子「笠女郎の歌にみる独自の表現と先行歌人」、『成蹊國文』第53号、pp1-11、2020